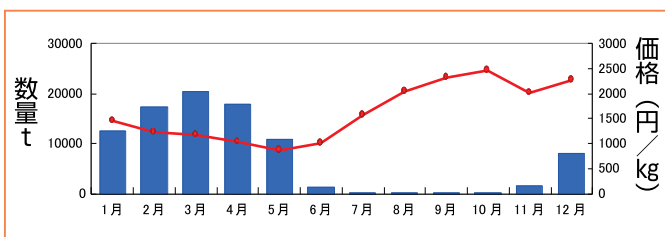


# 大粒の初夏どり向けイチゴ盛岡36号

《北国の気候を活かして初夏にイチゴを生産》

イチゴはケーキ用として1年を通じて需要があります。しかし、6月から11月頃にかけては、国産イチゴの生産量が落ち込み（図）、需要に供給が追いついていません。



図/国内主要都市の卸売市場におけるイチゴの卸売数量と価格 (2017年)。棒グラフが数量、折れ線グラフが価格を示す

東北や北海道などの寒冷地では、屋外でイチゴを栽培する露地栽培や、ハウスを用いて、より長い期間収穫する半促成栽培が行われており、国産イチゴが品薄となる初夏にイチゴが出荷されています。

これらの作型において用いられている既存品種「北の輝」は、果実が硬く収穫や輸送が行いやすい一方、果実表面の割れや種子の突出、収穫後の黒ずみが問題になることがありました。また、「豊雪姫」は、収量が多い一方、果実が軟らかく輸送性に劣る欠点がみられました。

そこで東北農業研究センターでは、これらの点の改良をめざし、青森県、岩手県、秋田県、山形県と共同研究を実施し、初夏どりに向く多収品種候補イチゴ盛岡36号を育成しました。

## 《イチゴ盛岡36号の特徴》

イチゴ盛岡36号は、東北地方などの寒冷地において、国産イチゴが品薄となる5月以降、7月頃まで収穫できる極晩生の1季成り性イチゴです。

その一番の特徴は、果実が大きく、形がよく揃うことです（写真）。露地栽培や、半促成栽培の一種である低温カット栽培において、その平均1果重は16gを超え、大粒となります（表）。乱形果や奇形果が少なく、果実の形がよく揃い、収量は「豊雪姫」並に多くなります（表）。

また、イチゴ盛岡36号は、「豊雪姫」より果実が硬く、「北の輝」で問題となる果実表面の割れや種子の突出、果色の黒ずみは発生しません。さらにイチゴ盛岡36号は、東北地方などで発生がみられる、うどんこ病レース0に対して抵抗性を

畑作園芸研究領域

**本城正憲**

HONJO, Masanori



写真/イチゴ盛岡36号の草姿と果実

表/イチゴ盛岡36号の収量

作型	品種名	商品果収量			平均1果重 (g)	商品果率 (果重) (%)
		果数 (x千個/a)	果重 (kg/a)	対「北の輝」比		
半促成栽培 (低温カット)	盛岡36号	19.0	302.0	151	16.2	96.7
	豊雪姫	24.4	301.3	150	12.3	96.6
	北の輝	17.5	200.5	100	11.5	91.4
露地栽培	盛岡36号	9.2	150.5	109	16.5	92.7
	豊雪姫	11.0	159.3	115	14.5	93.0
	北の輝	10.4	138.5	100	13.3	84.7

岩手県盛岡市における2013-2015, 2017年の平均値。  
 収穫時期：低温カット栽培5月中旬~7月下旬、露地栽培6月中旬~7月中旬。栽植密度571株/a。  
 商品果は6g以上の正形果および乱形果

示します。抵抗性遺伝子を有することは、東北農業研究センターとトヨタ社との共同研究により開発したDNAマーカー（東北農業研究センターたより第49号参照）においても示されています。

イチゴ盛岡36号は、今年度品種登録出願を予定しており、寒冷地における初夏どり作型のほか、大粒の特徴を生かして観光農園などにも活用されることが期待されます。